



1、海堂尊著 奏鳴曲「北里と鷗外」

◆両雄の宿命的な相克描く

項羽と劉邦（りゅうほう）、レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロ、西郷隆盛と大久保利通…といった具合に、同時代を生きた逸材同士がライヴァル関係となることはよくある。また、そのような関係を評して「両雄並び立たず」ともいう。海堂尊の『奏鳴曲 北里と鷗外』は、明治時代に医学界を牽引（けんいん）した北里柴三郎と森林太郎（鷗外）の、生涯続いたライヴァル関係を描いた評伝小説である。

無医村で育ち、幼い二人の弟をコレラで失った北里。津和野藩の典医の流れを汲（く）む誇り高い医家に生まれた森。生まれ育ちは対照的ながら、二人はともに感染症から日本国民を守るという志を抱き、ドイツに留学してコッホに学ぶ。だが、やがて彼らは道を違え、ついには対決に至る。

北里が浮かべば森が沈み、森が浮かべば北里が沈む…という両者の宿命的な関係は、互いの地位をかけた政治的な謀略合戦にまで発展してしまう。もともとの性格や生まれ育ちの違い、学んだ内容の相違なども対立の遠因ではあるものの、それ以上に、二人を取り巻く学閥や閥閥（けいぼつ）、後ろ楯（だて）となった政治家との間柄など、医学的な真理の探求とは本来無関係なはずの人間関係が大きな要因だった。

そのような俗な次元での足の引っぱり合いさえなければ、この二人がわだかまりを捨て、胸襟を開いてと

もに同じ夢に向けて協力する歴史もあり得たのではないかと惜しまれる。

主人公たちを取り巻く医学者たちも印象的に描かれているが、中でも強烈な存在感を放つのが、森の上官にあたる陸軍軍医総監・石黒忠恵（ただのり）だ。政治的手腕に長（た）けた世渡り上手で、森や北里よりも長生きし、「世の中、生き残ったもん勝ちだよ」と嘯（うそぶ）いた彼だが、現在、彼の知名度は森や北里に及ばない。長い目で見ると歴史の勝者は誰だったのかを考えさせられる。

二人の医学者の偉大な功績のみならず失敗や人間的弱点をも描いた本書は、医学と感染症との戦いにおける試行錯誤という観点から、コロナ禍の現在にも通ずる物語となっている。

（文芸春秋・2200円）

1961年生まれ。医師、作家。著書『チーム・バチスタの栄光』など。

〔評〕千街晶之（文芸評論家）

2、京都大学福島雅典名誉教授の厚労省喝破がすごい

11月25日に衆議院議員会館で行われた超党派議員連盟による「新型コロナウイルスワクチン接種と死亡事例の因果関係を考える」勉強会の動画がアップされています。厚労省も参加して、ワクチン接種後死者の遺族のほか、この問題に真剣に意見を述べて来た学者たちが参加しています。

特に、京都大学福島雅典名誉教授が厚労省に向かって「このワクチンを学術的にきちんと洞察もせず扇動した人間は、断罪だよ」

「即刻評価委員会を解散して全例調査しなさい！」

「無能な学者をそろえて、もう御用学者とも言えない。曲学阿世の徒！」

科学と医学を徹底的に無視する、こんなことはあってはならない。

科学技術立国でしょう。科学と医学を無視して、医療を荒廃させて、無茶苦茶じゃないか」

等々、怒りの喝破をしているシーンがすごい！

mRNA ワクチンの危険性、接種率と感染増加の関連についての科学的な解説なども行われています。

もっと拡散されて、大きく報道されるべきでしょう。

2022.11.26 10:07